

半七捕物帳

半七先生

岡本綺堂

青空文庫

わたしがいつでも通される横六畳の座敷には、そこに少しく不釣合いだと思われるような大きい立派な額がくがかけられて、額には草書そうしょで『報恩額』と筆太ふでぶとにしるしてあった。嘉永庚戌かのえいぬ、七月、山村菱秋書という落款らくかんで、半七先生に贈ると書いてあるのも何だかおかしいようにも思われた。この額のいわれを一度きいて見ようと思いつながら、いつもほかの話にまぎれて忘れていたが、ある時ふと気がついてそれを言い出すと、老人は持っている煙管きせるでその額を指しながら大きく笑った。

「はは、これですか。ははははは。どうです、半七先生が面白いじゃありませんか。これでも先生ですぞ。この額をかいてくれたのは、神田の手習い師匠の山村小左衛門という人で、菱秋りょうしゅうというのは其の人の号ですよ」

「それにしても、報恩額というのはどういう訳です。なにかのお札にでも書いてくれたんですか」と、わたしは訊きいた。

「そうですよ。まあ、お札の心で書いてくれたんです。それにはこういう因縁があるので

……。又いつもの手柄話をして聴かせますかね」

嘉永三年七月六日の宵は、二つの星のためにあしたを祝福するように、あぎやかに晴れ渡つていた。七たなばた夕まつりはその前日から準備をしておくのが習いであるので、糸いろいろの竹の花とむかしの俳人に詠まれた笹竹は、きょうから家々の上にたかく立てられて、五色ごしきにいろどられた色紙いろがみや短尺たんざくが夜風にゆるくながれているのは、いつもの七夕の夜と変らなかつたが、今年は残暑が強いので、それは姿ばかりの秋であつた。とても早くは寝られないので、どこの店さきも何処の縁台も涼みながらの話し声で賑わつていた。半七も物ものほし干へあがつて、今夜からもう流れているらしい天あまの河をながめていると、下から女房のお仙が声をかけた。

「ちよいと、お糸くめさんが来てよ」

「そうか」と、云つたばかりで、半七はべつに気にも留めないでいると、つづいてお糸の声こゑがきこえた。

「兄さん。ちよいと降りて来てくださいよ。すこし話があるんだから」

「なんだ」

団扇うちわを持って降りてくると、お糸は待ち兼ねたように摺り寄って云った。

「あの、早速ですがね、おまえさんも知っているでしょう、甲州屋のなあちやんを……」
「むむ、知っている」

半七の妹が神田の明神下に常磐津の師匠をして、母と共に暮らしていることは、前にもしばしば云った。そのすぐ近所に甲州屋という生薬屋きぐすりやがあつて、そこのお直なおという娘がお糸のところへ稽古に通っているのを、半七も知っていた。

「そのなあちやんが何処へか行つてしまったのよ」と、お糸は少し小声で云った。

かれの訴えによると、お直のなあちやんは行方不明になつたというのである。お直はことし十三で、手習い師匠山村小左衛門へも通つていた。山村は甲州屋から三町はなあまり距れているところに古く住んで、常に八九十から百人あまりの弟子を教えていて、書流は江戸時代に最も多い溝みぞ口流くちであつた。手習い一方でなく、十露盤そろばんも教えていたが、人物も手堅く、教授もなかなか親切であるといふので、親たちのあいだには評判がよかつた。しかし弟子のしつけ方がすこぶる厳しい方で、かの寺小屋の芝居でもみる涎よだれくりのようになり、水を持つて立たされる手習い子が毎日幾人もあつた。少し怠けると、すぐ大叱言おおごことのかみなりが頭の上に落ちかかつて来るので、いわゆる「雷師匠」として弟子たちにひどく恐れら

れていた。

手習い子は手ならい草紙そうしで習って、ときどきに清書草紙に書くのであるが、そのなかでも正月の書初めかきぞと、七月の七夕祭りかきぞとが、一年に二度のおおぜいしょ大清書というので、正月には別に半紙にかいて、稽古場の鴨居かめいに貼りつける。大きい子どもは唐紙とうしや白紙に書くのもある。七夕には五色のいろ紙に書いて笹竹ささたけに下げる。これは普通の色紙しきしでなく、その時節にかぎって市中の紙屋で売っている薄い短たんざく尺型の廉やす紙きれであるが、この時にも大きい子供はほんとうの色紙や短尺たんざくに書くのもある。七月に入ると、手習い子はみな下清書をはじめ、前日の六日にいよいよ其の大清書にかかるのである。それが一種の学年試験のようなもので、師匠は一々それを審査して、その成績の順序を定めるのであるから、子供こごころにも競争心がないでもない。上位の方に扱より出されたといえ、その親たちも鼻を高くするのである。きようはその大清書の日で、甲州屋のお直も紅い短尺たんざくに何かの歌を書かされたのであるが、それがひどく出来がわるいというので師匠の小左衛門から叱なられた。

お直は手習いの成績はよい方であったが、今度はどうしたものか非常に出来が悪かったので、笹竹のずっと下の方にかけられた。ここの師匠は成績の順序で色紙いろがみをかけるので、第一番のものは笹竹の頂上にひるがえっていて、それから順々に、下枝したえにおいて来るので

あつた。お直は自分の短尺が同年の稽古朋輩のなかでも甚だしく下の方にかけてあるのを見て、さつきからもう泣き声になつていたところを、更に師匠からきびしく叱られたので、彼女はとうとう声をあげて泣き出した。師匠の御新造ごしんぞがさすがに気の毒がつて、泣いているお直をなだめて帰してやったが、一人で帰すのはなんだか心もとないので、お力りきという近所の娘と一緒につけて出すと、お直は途中で不意にお力りきのそばを離れて横町へ駆け込んだまま姿を見うしなつてしまつた。それはきよひるころの午頃ひるころのことで、お直はそれぎり自分の店へも戻らないのであつた。

お糸がそれを知つたのは夕方のもので、もしやこちらにお直は来ていないかと甲州屋から聞きあわせに来たので、だんだんその仔細きを訊いてみると、それが手習いの帰りにゆくえ不明となつたことが初めて判つた。殊に前に云つたような事情があるだけに、お糸も一種の不安を感じて、日が暮れてから甲州屋をたずねると、お直はまだ帰らないとのことであつた。親たちも心配して、親類や友達などの心あたりを方々聞きあわせたが、彼女はどこへも立ち廻つた形跡はなかつた。

稽古帰りに無断でよそへ廻るなどは、今までかつて例のないことであると、甲州屋では云つていた。念のために師匠のところへも報しらせてやると、小左衛門の御新造のお貞もお

どろいて駈けつけて来たが、どの人もただ心配するばかりでどうする術も知らなかった。こうしているうちに時刻はだんだんに過ぎてゆくので、人々の不安はいよいよ募つて来た。この場合、兄をたのむよりほかはないと思つたので、お糸はそのわけを人々にも話して、あまの河の大きく横たわっている空の下を神田三河町まで急いで来たのであつた。

「ねえ、なあちゃんはどうしたんでしよう」と、お糸はこの話を終つて兄の顔を見つめた。「なにしろ、甲州屋でも心配しているだろう」

半七はこれにやや似た探索の経験をもつていた。それは前に云つた「朝顔屋敷」の一件であるが、それとこれとは全く事情が違つているらしく感じられた。

「お師匠さんがあんまり叱つたから悪いんだわね」と、女房のお仙がそばから口を出した。「そりやあそうですともさ」と、お糸は腹立たしそうに答えた。「かみなり師匠があんまりがみがみ云うからですわ。何か悪い事でもしたというなら格別、たなばた様の短尺なんぞちつとぐらい出来が悪いからといって、そんなに叱る事はないじゃありませんか。まして男と違つて女の子ですもの、むやみな叱言を云えば何事が出来するかわからない。一体、あの雷師匠が判らずやなんですからね、ただむやみに吠鳴り散らせばいいかと思つて……。あんなことで子供たちを仕立てて行かれるもんですかよ」

彼女は口をきわめて雷師匠を罵ののった。まえにも云う通り、小左衛門は手堅い人物であるので、ふだんから自分の手習い子が遊芸の稽古所などへ通うのをあまり憚よろこばないふうであった。それが自然とお糸の耳にもひびいているので、この場合、かみなり師匠に対する彼女の反感は一層強いらしかった。

「大勢のまえであまり激しく叱り付けられたもんだから、気の小さいなあちゃんは朋輩にきまりも悪し、家へ帰れば又叱られるだろうと思つて、可哀そうに何処へか姿をかくしてしまつたんですよ。ひよつとすると、井戸か川へでも飛び込んだかも知れない。そうなれば師匠が弟子を殺したも同然じやありませんか。かみなり師匠の奴が下手人げしゆにんですわ」と、お糸は泣き声をふるわせて又罵った。

「まあ、静かにしろ」と、半七は叱るように云つた。「そんなことは今更云つたつて始まらねえ。まあ、落ち着いて考えさせてくれ。甲州屋の娘もまだ十二や十三じゃあ、色気の方は大丈夫だろう」

「そりやあ大丈夫。そんなことの無いのはあたしが受け合います」

「内輪うちわになにも面倒はあるめえな」

「そんなことはない筈です」

お直には藤太郎という兄がある。両親も揃っている。店の若い衆が二人と小僧が三人、ほかにはお広という老婢ばあやと、おすみという若い下女がいる。店がかりは派手でないが、手堅い商売をして内証も裕ゆたかであるらしい。親類たちのあいだにも面倒が起ったという噂も聞かない。したがって今度のお直の家出も、内輪の事情からではないに決まっていると、お糸は保証するように云った。

「そうか」と、半七はまだ考えていた。「だが、おめえばかりの話じゃあ判らねえ。ともかくも甲州屋へ行ってみよう」

「ああ、すぐに来てください」

お糸は兄をうながして表へ出ると、暑いと云つても旧曆の七月の宵はおいおいに更ふけて、夜の露らしいものが大屋根の笹竹にしつとりと降おりているらしかった。

二

甲州屋へ行つて、お直の親たちにも逢つたが、お糸が持ってきた報告以外の新しい事実を、半七はなんにも探り出すことが出来なかつた。どの人の意見もお糸と同様で、短尺

の不出来と師匠の叱言こごととが気の小さい娘をどこへか追いやったのであるということに一致していた。半七も先ずそう考えるよりほかはなかった。

越ヶ谷こしやの方に甲州屋の親類があつて、お直は母につれられて一度行つたことがあるので、よもやとは思ふものの、兄の藤太郎が店の者をつれて、あしたの早朝に越ヶ谷へ訪ねてゆくことになっている。甲州屋に取つては、それがおぼつかない一縷いちるの望みであつた。娘が家出のことは無論、町役人にも届けて置いた。両国や永代えいたいの川筋へも人をやつて、その注意を橋番にもたのんで置いた。甲州屋としては、もうほかに施すほどこべき手だてもないので、半七は今更なんの助言をあたえようもなかつた。しかし明日あしたになつたならば、自分の者どもに云いつけて、せいぜい心あたりを探させてみることを約束して、半七はもう四ツ（午後十時）頃、甲州屋を出ると、まだ半町も行き過ぎないうちに、あとから息を切つて追つてくるものがあつた。

「もし、親分さん、三河町の親分さん」

女の声らしいので、誰かと思つて立ち止まると、それは甲州屋のばあやのお広で、かれはあわただしくささやいた。

「親分さんに少し内ないない々々で申し上げて置きたいことがございますが……。旦那やおかみさ

んは滅多にそんなことを云つちやあならないと云つて居るのですが、どうも黙つて居りましては気が済みませんので……。ちよいとお前さんのお耳に入れて置きたいと存じますが……」

お広はお直の乳母として雇われたものであったが、その儘そこに長年して、お直が生長の後までもばあやと呼ばれて奉公しているのであった。年はもう四十ぐらいの大柄な女で、ふだんから正直でよく働くと云われていた。

「そこで、どんな話ですえ」と、半七は小声できいた。

「申してもよろしゅうございましょうか」

「なんでもいいから聴かせてもらおうじゃあねえか」

「では、これはただ内々で申し上げるのでございますが……」

まえ置きをして、お広がそつと話し出すのを聴くと、お広はきようお直と一緒に帰つて来たというお力がどうも怪しいというのであった。お力の家は隣り町の倉田屋という瀬戸物屋で、甲州屋とはふだんから心安く交際しているのであるが、倉田屋の女房はひどく見得坊で、おまけに僻み根性が強くて、お広の眼から見るとどうも面白くない質の女であるらしい。倉田屋には二人の娘があつて、姉のお紋は今年十八で、妹のお力はお直と同

い年の十三である。その姉娘のお紋をお直の兄の藤太郎の嫁にくれるというような話が、
 かつて双方の親たちのあいだに起つた事もあつたが、別にたしかに取り極めた約束とい
 でもなくて、まずそのままになつてゐるうちに、甲州屋では今度京橋の同業者の店から嫁
 を貰う相談がまとまつて、この九月にはいよいよ婚礼をすることになった。それを洩れ聞
 いて、倉田屋ではひどく怒つてゐるらしい。勿論、許嫁いいなづけというわけでもないの、表
 向きに苦情を持ち込んでくることは出来なかつたが、内心では甲州屋を怨んでゐるらしい。
 殊にひがみ根性の強い倉田屋の女房は、平生へいぜいあれほど懇意こんいにしていながら、あまりに人
 を踏みつけにした仕方であると云つて非常にくやしがつてゐることは、出入りの女髪おんなかみゆ
 結いの口からも聞いている。現にこのあいだ、お広が倉田屋へ買物に行つた時にも、女房
 は口に針を含んでゐるような忌味いやみを云つた。それらの事情から考えると、倉田屋ではそれ
 を根に持つて、藤太郎の妹のお直に対して何かの復讐を加えたのではあるまいかといふの
 であつた。

「ふうむ、それは初めて聴いた」と、半七はうなずいた。「だが、唯それだけのことで、
 ほかにはもう証拠らしいものはないんだね」

「それに、倉田屋ではどうもなあちやんを怨んでゐるらしいんです」と、お広はさらに説

明した。

「なあちゃんはお力ちゃんのところへ始終遊びに行くので、姉さんのお紋さんともよく識しつています。それで、こっちでお紋さんをもらうのを見合わせたのは、なあちゃんが何か親たちや兄さんにいつけ口をしたように思っているらしいんです。一体、お紋さんという子も阿母おつかさんに似た見得坊で、おしやべりのお転婆てんばで、近所で誰も褒める者はありません。甲州屋でお嫁に貰うのを見合わせたのも、つまりはそのせいなんです、それがやつぱり身鼻みびいで、自分の娘の悪いことは棚にあげて、ふだん遊びに行くなあちゃんが、家へ帰って何か讒訴ざんそでもしたように思い込んでいるらしいんです。ひがみ根性の強いおかみさんのことです、それも仕方がありませんけれども、外道げどうの逆恨さかうらみでむやみに人を怨んで、おまけに罪もないなあちゃんを疑って、万一そんなことを仕出しでかしたとすれば、どうしたって打うちやつて置くことが出来ません。旦那やおかみさんが何と云おうとも、わたくしが黙もくっていられません。ねえ、親分さん。そうじゃございませんか」

これはお広の一料簡でなく、甲州屋の親たちも内々のうたがいを懐いだいていながら、迂闊うかつにそんなことを口外することは出来ない、わざと自分のあとを追わせて、お広の一料簡のつもりで密告させたのではあるまいかと半七は思った。

「それで、そのお力という娘はどんな子だえ」

「やっぱり阿母さんや姉さんにそっくりで、なかなかお転婆の、強い子なんですよ。からだも大きくって、なあちやんと同じ年ですけれど二つぐらいも年上にみえます」

「そうか。それじゃあともかくもその倉田屋へ行ってみよう。もう寝たかも知れねえが、まあ其の家^{うち}だけでも教えてもらおう」

お広に案内させて、半七は引り返した。その瀬戸物屋は甲州屋の隣り町角から四軒目で、間口は三間か三間半ぐらいもあるらしく、その店がまえは悪そうもなかった。表の大戸はもう卸^{おろ}してあったが、軒の下に細長い床^{しょうぎ}几を置いて、ひとりの若い者と小僧とが涼んでいた。となりの糸屋は店を半分あけていて、その前にもやはり二、三人の男がたたずんで何かしゃべっていた。どこかで籠の虫の声もきこえた。

途中で申し合わせてあるので、お広は近寄って倉田屋の若い者に声をかけた。

「今晚は……。どうもいつまでもお暑いことでございます」

「やあ、今晚は……」と、若い者も挨拶しながら床几^たを起ちあがった。「ばあやさん。なあちやんは帰りましたか」

甲州屋からは昼間と宵と二度も聞きあわせの使が来ているので、ここの店の者共もお直

が家出のことを知っていた。まだ帰らないというお広の返事をきいて、若い者も気の毒そうに云った。

「どうしたんでしようねえ。内のおかみさんも大変に心配しているんですよ。お力ちゃんと一緒に帰ってきて、途中でこんなことがあっちゃあ、甲州屋さんにも申し訳がないと云つて……」

「皆さんはもうお寝やすみになりましたか」と、お広は訊きいた。

「ええ、おかみさんもお紋さんもよそから帰つて来て、もうすこし前に寝やすましたが、起しましうか」

「いいえ、それには及びません」

「ばあさんはまだ探して歩いているんですかえ」

「なにしろ心配でなりませんからね。この方とごいっしょに、あてども無しにそこらを探してあるいているんです」

「それは御苦労さまですね。お察し申します」

「どうぞ皆さんによろしく」

こんな挨拶をして、お広はここを立ち去った。半七もあとから黙って付いて行つた。夜

もおいおいに更^ふけて来て、とても今夜のことには行きそうもないので、半七は町内の角でお広に別れた。

家へ帰る途中で、半七はいろいろに考えた。若い娘が清書の不出来を師匠に叱られて、朋輩の手前、親の手前、面目なさに姿をかくすというようなことは、あながち世間に例のない話でもない。お糸の意見もそれであった。婚礼を破談にされた遺恨から、心のひがんだ女親がその復讐のために、相手の男の妹娘をどこへか隠したのであろうというお広の密告は、少しく穿^{うが}ち過ぎた想像ではあるが、そんなことが決してないとは云えない。一途^{いちず}に思いつめた女の心のおそろしいことを、半七は多年の経験でよく知っていた。お糸の判断は自然であり、お広の想像はやや不自然であるが、世のなかには普通の尺^{ものさし}度で測ることの出来ない不思議の多いのをかんがえると、半七はまだ容易にどちらへも勝負をつけるわけには行かなかつた。彼は賽^{さい}をつかんだまま神田の家へ帰った。

三

その夜はあけて、七日の朝になった。きょうも朝から暑い日で、あまの河には水が増し

そうもなかつた。いろがみの林を作つた町々の上に、碧い^{あお}大空が光っていた。

半七は朝飯をすませて、すぐに山村小左衛門の家をたずねると、きようは五節句で稽古は休みであつた。小左衛門もお直の一条では胸を痛めているので、半七を奥へ通すと、丁寧に挨拶して、なんとか探索の方法はあるまいかと頼むように相談した。かれは四十五六の人柄のいい男で、半七の問いに対してこう答えた。

「お直もお力も九つの春から手習いに来て居ります。わたくしも自分の教え子の行状については、ふだんから相当に気をつけて居りますが、お直はおとなしいようでもなかなか強情の氣質、お力は男の子のように跳ね返つている女で、人間は少し愚^{おろか}らしく見えます。それでも二人は仲がよかつたようで、毎日誘いあわせて通つて居りました。今度のことについては、わたくしが何かお直をきびしく叱つたので、それで家出したように甲州屋の親たちは思つているようですが、それは大きな間違いです。尤も^{もつと}、わたくしは弟子のしつけ方は随分きびしい方で、世間ではかみなり師匠とか云つているようですが、いかにわたくしが雷でも、仔細もなしにむやみに弟子たちを叱つたり折檻^{せつかん}したりする筈はありません」

かみなり師匠がお直を叱つたのは、たなばたの清書が出来な為ばかりではなかつた。きのうの朝、お直はこの稽古場でその袂^{たもと}から二通の手紙を取りおとした。師匠はすぐにそ

れを見つけて、それはなんだと詮議すると、お直はあわててそれを自分のふところに押し込んでしまって、一言の返事もしなかった。封は切らぬから上書うわがきだけを見せろと云ったが、彼女は決して見せなかつた。誰の手紙かと訊きいても、彼女はやはり強情に答えなかつた。

まだ十三の小娘で、まさかに色恋の文ふみではあるまいと思うものの、彼女が強情に隠しているだけに、小左衛門は一種の疑惑と不安を感じて、どうしてもその手紙をみせなければ、今日きょうはいつまでも止めて置くぞと嚇おどしつけると、お直はわつと声をたてて泣き出した。その声が奥まできこえて、御新造のお貞も出て来た。ふだんから師匠のあまり厳しいのを苦にしているお貞は、とにかく仲裁して何事もなしに済ませたが、清書の不出来で叱られた上に、更に又こんな事件が出しゅつ来して、お直はいつまでも泣きやまないのを、お貞は賺すかし宥なだめて、お力と共に帰してやったのである。甲州屋へ行つて、お力はなんと告げたか知らないが、事實はまったく此の通りで、お直が強情に隠していたその文がなんであるかは判らない。甲州屋ではこの事情を知らないで、なにか自分が無理な叱言こいごでも云つたように誤解していられては甚だ迷惑であるから、実はこれから甲州屋へ出向いて、お直の親たちにもその訳を話して聞かせようと思つていと、小左衛門は云つた。

「いや、判りました。わたくしは今まで大きに勘ちがいをして居りました」と、半七は微笑みながら云った。

「就きましては、先生。どうかこの一件はわたくしにお任せ下さる訳にはまいりませうか。きつと埒をあけてお目にかけます」

「勿論それはこちらからお願い申すので……。そうしますと、わたくしが甲州屋へ行くのはどうしましうかな」と、小左衛門は少し考えていた。

「どうか、もうしばらくお見合わせが願いたいものですが……」

「承知しました」

新しい獲物をつかんで、半七はかみなり師匠の門を出た。師匠は嘘をつくような人物ではない。今の話がほんとうであるとすれば、お糸の判断は間違っていた。お広の想像も少しく的はずれているらしい。半七はそれからすぐに甲州屋へゆくと、お直のゆくえはまだ知れないので、店じゅうの者がみな暗い顔をしていた。ゆうべはまんじりともしなかつたというので、お広は眼を窪ませていた。

「若旦那はもう立ちましたかえ」と、半七は先ず訊いた。

「まだでございます」と、居あわせた店の者が答えた。

「大層おせいじやありませんか」

「六ツ半（午前七時）頃には立つ筈だったのですが、あけがた 暁方から急に頭痛がすると云って、まだ二階に寝て居ります。たぶん寝冷えをしたのだらうというので、今朝けさほどは立つのを止めました」

「そうですか、それはあいにくでしたね。お見舞ながら二階へちよいと通つてもよござんすかえ」

「はい、ちよいとお待ちください」

店の者は二階へあがつて行つたが、やがて又引つ返して来て、取り散らしてありますが、どうぞお通りくださいと案内した。

二階は六畳と八畳のふた間で、藤太郎は表に向いた六畳に寝ていたらしいが、半七のあがつて行つた時には、もう起き直つて蒲団ふとんのうえに行儀よく坐っていた。藤太郎はことしはたち二十歳の小柄の男で、いかにも病人らしい蒼ざめた顔をしていた。

「お早うございます」と、藤太郎は手をついた。「このたびはいろいろと御心配をかけて恐れ入ります」

「どこかお悪いそうですね」と、半七はかれの顔をのぞきながら云つた。「なるほど、顔

の色がよくないようだ、起きていてもいいのですかえ」

「こんな体ていたらくで失礼をいたします。たいした事でもございませんが、どうもあけがた暁方から頭が痛みまして……。あいにくの時ときでまことに困って居ります」

医者いしやに診みて貰もらったかと訊くと、それほどのことでもないらしいので、差しあたりは店の薬を飲んでいると藤太郎は云った。芝に上手な占うらない者しやがあるので、母は朝からそこへたずねて行いった。父は日本橋の親類へ相談に行いった。妹のたよりが一向判らないので、家うちじゅうがゆうべから碌々に寝ないで騒いでいると彼は話した。

「そうすると、おまえさんは病氣のよくなり次第に、越ヶ谷とかへ行くつもりですかえ」と、半七はまた訊いた。

「はい。ともかくも念晴らしに一度は行いつて来たいと思おもつて居いります」

「きつと出いかけますかえ」

「はい」

「およしなせえ、くたびれ儲けだ。路用をつかうだけ無駄なことだ」

「そうでございましょうか」と、藤太郎はすこし考えているらしかった。

「なにも首をひねることはねえ。出いかけるくらいなら、今朝けさなぜ直ぐに出いて行きなさらね

え」

と、半七はあざ笑った。「仮病けびょうをつかつて、家の二階にごろごろしていることはねえ。さつさと飛び起きて、草鞋わらじをはく支度をするがいいじゃあねえか」

「いえ、決して仮病では……。唯今も申す通り、どうも寝冷えをいたしたとみえて、あけが 暁方たから頭が痛みまして……」

「あたまの痛てえのはほかに訳があるだろう。倉田屋の姉娘を呼んで来て看病して貰つちやあどうだね」

藤太郎の顔の色はいよいよ蒼くなつた。

「おまえさんは妹を使にして、倉田屋の娘と文ふみのやりとりをしているだろう」と、半七は畳みかけて云つた。

「倉田屋の娘もやっぱり自分の妹を使にしている。どっちの妹も稽古朋輩だから、それはまことに都合がいいわけだ。ここの妹がきのう雷師匠に嚇かされたのは、清書が出来のせいじゃあねえ。稽古場で手紙を落としたからだ。男のか女のか知らねえが、それを向うへ渡そうとするのか、それとも向うから受け取ったか、どっちにしてもお前さんと倉田屋の姉娘とは係り合いを逃がられねえ。さあ、今更となつていつまでも隠し立てをしてい

るのは、よくねえことだ。親たちに苦勞をかけ、家じゆうの者をさわがして、お前さんが仮病をつかつて平気で寝てもいられぬえじやあねえか。いや、仮病はわかっている。どうで越ヶ谷へ行つても無駄だということを百も承知しているから、頭が痛えの、尻が痒いのと云つて、一寸逃がれをしているのだ。おまえさんの顔の色が悪いのは病氣じやあねえ。ほかに苦勞があるからだ。薄ぼんやりしている倉田屋の妹娘を引つ張り出して、あたまから嚇かして詮議すれば何もかも判ることだが、そんなことはしたくねえから、それでこうして膝組みでおまえさんに訊くんだ。一体おまえさん達は今までどこで逢つていたんだ。どうで遠いところじやあるぬえ。真つ先にそれを教せえて貰おうじやあねえか」

藤太郎は蒲団のうえに手をついたまま、しばらく顔をあげなかつた。その蒼ざめた額からは汗のしずくが糸をひいたように流れ落ちていた。

四

半七は甲州屋を出て、池の端へ行つた。近所で女髪結のお豊の家をきくと、すぐに知れて、それは狭い露路をはいって二軒目の小さい二階家であつた。

格子にならんだ台所で、三十三四の女が今夜のたなばたに供えるらしい素麵そうめんを冷やしていた。半七は近よつて声をかけると、かれは主婦あるじのお豊であつた。ここに誰か倉田屋の人は来ていないかと訊くと、お豊は不安らしい眼をしてじろじろ眺めながら、誰も来ないと言やかに答えた。

「それでは、甲州屋さんから誰かまいって居りますまいか」

「いいえ」と、お豊はやはり無愛想に答えた。

「まったく来て居りませんかでしょうか」

「来ていませんよ」と、お豊は煩うるさそうに云つた。「一体おまえさんはどこから来たんです」

「甲州屋からまいりました」

お豊は黙つて半七の顔を見つめてみると、半七はにやにや笑いながら云い出した。

「いえ、御心配なさることはありません。わたしは甲州屋の藤さんに頼まれて来たんです。倉田屋のお紋さんと藤さんが始終この二階へ来ることもみんな知っています。御存じだかどうだか知りませんが、甲州屋のなあちゃんが昨日きのうから家出をして今にゆくえが知れないので、家では大騒うちぎをしているんです。藤さんが来る筈ですが、すこし加減が悪くつて、

けさから寝込んでいるので、わたしがその使をたのまれて来ました。なあちゃんは昨日から一度もここへ来ませんかしら」

「いいえ、一度もお見えになりませんよ」

詞づかいは余ほど丁寧になったが、彼女は見識らない使の男にたいしてやはり油断しないらしかった。

「もし、おかみさん、あの壁にかかっているのはなんですよ」と、半七は伸び上がってだしぬけに奥をゆびさした。

残暑の強い朝であるから、そこらは明け放してあった。格子のなかの上がり口には新しい葺戸が半分しめてあったが、台所と奥とのあいだの障子は取り払われて、六畳くらいは古びた箆筒が置いてあった。助炭をかけた長火鉢は隅の方に押しやられて、その傍には古びた箆筒が置いてあった。それにつづいた鼠壁には、どこからかの貰いものらしい二、三本の団扇が袋に入れたままで逆さに懸かっていた。

「あの団扇ですかえ」と、お豊は奥を見かえった。

「いいえ、あの団扇の隣りに懸かっているのは……。あれはなんですよ。お草紙のようですね」

「うちの子供のお草紙です」

「ちよいと持つて来て、見せてくれませんか」

「お草紙をどうするんですよ」

「どうしてもいい、用があるから見せると云うんだ」と、半七は少し声をあらくした。

「強情を張っていると、おれが行つて取つてくる」

草履をぬいで台所から上がろうとすると、お豊はさえぎるように起ちあがった。

「おまえさん。人の家へむやみにはいつて来て、どうするんですよ」

半七はつかつかと茶の間へ踏み込んで、団扇のとなりに懸けてある一冊の清書草紙を手に取った。

「今聞いていれば、うちの子供のお草紙だと云つたな。嘘つき阿魔め。ここの家にどんな子がいる。猫の子一匹もいねえじゃあねえか。六十幾つになるつんぼの婆さんとおめえの二人つきりだということは近所で訊いて知つていゝぞ。第一この草紙の表紙になんと書いてある。庚戌かのえいぬ、正月、なお……このなおというのはだれの名だ。世間におなじ名はあつても、ここでこの草紙を見つけた以上は云い抜けはさせねえ。甲州屋のむすめの手習い草紙がどうしてここに懸けてあるんだ。仔細をいえ。わけを云え」

お豊は唾おしのように突つ立っていると、半七は片手に草紙を持ちながら、かた手で彼女の腕をつかんだ。

「婆はどこへ行つた」

「近所へ買物に出ました」と、お豊は口のなかで答えた。

「そんなら二階へ案内しろ」

彼女を引き摺るようにして、せまい掛け階ぼしご子をのぼつてゆくと、二階の四畳半には誰もいなかった。半七は念のために押入れをあけて見た。古い葛籠つづらをゆすつてみた。

「まあ、坐れ」と、かれは再びお豊の腕をつかんで、四畳半のまんなか引き据えた。

「これ、正直に云え。さつきは甲州屋の使と云つたが、御用で調べるのだ。甲州屋のお直はきのうここへ来たか」

草紙を眼のさきに突きつけられて、お豊はもう包み切れなくなつた。かれは恐れ入つて白状した。甲州屋のお直はこの家へ来たのである。きのうの午頃ひるにお豊が得意場から帰つてくると、途中で倉田屋の娘と甲州屋のむすめが二人連れで来るのに逢つた。お直はしきりに泣いているのを、お力がなだめているらしかつた。どちらも自分の得意場の娘であるので、お豊は見すごし兼ねて立ち寄つて、もしや喧嘩でもしたのではないかと訊きくと、

お直が師匠さんに叱られたのであると判った。それもほかのことで叱られたとあれば、お豊もいい加減になだめて別れるのであったが、お力から渡されたお紋の手紙を稽古場で取り落して、それを雷師匠に見つけられたのであると聞いて、お豊もすこし驚いた。

甲州屋の息子と倉田屋の姉娘とのあいだには、半七が睨んだ通りの関係が結びつけられていた。親たち同士は単に口さきの軽い話ぐらいに過ぎなかったが、若いもの同士は更に深入りをして、おなじ手習い師匠にかよう双方の妹がいつも文ふみつかいの役目を勤めさせられていた。女髪結のお豊は一種の慾心から時々自分の二階をお紋と藤太郎とに貸していた。こういうわけで、お豊もこの事件に係り合いがあるだけに、秘密の手紙を師匠に見つけられたと聞いて顔色をくもらせた。相手は名代なだいのかみなりであるから、おそらくこのままでは済ませまい。お直が怪しい手紙を隠し持っていたということを、甲州屋の親たちに一応通知するかも知れない。そうして、二人の秘密が発覚したあかつきには、その取り持ちをした自分も当然その係り合いを逃がれることは出来ない。双方の親たちからやかましい掛け合いをうけた上に、二軒の得意場をうしなうのは知れている。しかも彼女が現在住んでいる池の端の裏屋は甲州屋の家作かやくであるから、ここもおそらく追いついて立てられるであろう。そればかりでなく、そんな噂が世間にひろまれば、自分の信用はひどく傷つけられて、更

に幾軒の得意場を失うかも知れない。あるいは此の土地で稼業が出来ないようになるかも知れない。それからそれへと考えてゆくと、お豊はなかなか落ち着いていられなくなった。なにしろ往来ではどうにもならないというので、彼女はともかくもお力とお直を自分のうちへ連れて行つて、二人の娘の持つている清書草紙を下の壁にかけて置いて二階へ通した。お豊は更にお紋と藤太郎をよんで来て、なんとか善後策を講ずるつもりで、すぐ甲州屋へ行つてみると、息子はいにく留守であつた。倉田屋の店には娘がいたので、お豊はそつと呼び出してささやくと、お紋もおどろいて一緒に出て来た。

女髪結の家の二階で、お紋は自分の妹とお直に逢つた。かれはお直の不注意を激しく責め立てた。それが雷師匠に輪をかけたかとも思われるほど凄まじい権幕けんまくであるので、お豊は又びつくりした。しかしそれにはわけのある事で、お紋がこの頃すこしく取りのぼせているらしいことをお豊も内々知らないではなかつた。若い同士の秘密を知らない甲州屋では、今度ある媒妁なこうじやくち口に乗せられて、倉田屋の話は忘れたように、よそから藤太郎の嫁をもらうことになつた。気の弱い息子は正面からそれに反対する勇氣もなくて、ただ内々で苦しんでいるうちに、その縁談はすべるように進行し、近々結納ゆいのうを取りかわすまでに運ばれて来たので、それを知つたお紋は決して承知しなかつた。かれは男の不実をはげし

く責めて、一体わたしというものをどうしてくれるのだとせまったが、男の挨拶がとかくに煮え切らないので、お紋は焦^しれて怨んで、この頃ではなんだか半病人のようになっていた。

倉田屋の親たちも無論に怒っていた。しかし自分の娘と藤太郎との関係がそんな峠まで登りつめているとはさすがに気がつかないで、いたずらに蔭^{かげぐち}口を云うくらいですごしていたが、若い娘の胸の火はこの頃の暑さ以上に燃えて熱して、かれの魂は憤怒^{ふんぬ}に焼けただけれていた。かれは毎日のように長い手紙をかい、それを妹に持たせてやって、男の妹の手から憎い男に突き付けさせていた。それほどに彼女の恨みの籠った手紙を、お直が不用意に取り落したと聞いて、お紋はむやみに怒った。一種の鬼女になっているような彼女は、噛みつくようにお直に食ってかかって、こんなことでは今までの手紙もたしかに兄さんにとどけてくれたかどうか判らないなどと云った。それでもお豊の仲裁で、その方は先ずどうにか納まったが、一方の藤太郎が出て来ないのと、一方のお紋は半氣違いのようになっていて、お豊が心配している肝腎の善後策は一向に要領を得なかった。彼女もこれには当惑して、お紋をなだめて待たせて置いて、再び藤太郎を呼び出しにゆくと、彼はまだ戻らないとのことであった。或いは隠れているのではないかとも疑ったが、しいて詮

議もならないので其の儘むなしく帰つてくると、留守のあいだに大椿事ちんじがしゅつたい出しゅつ来たいして
た。

二階にはお紋の姉きょうだい妹いとお豊の母とが黙つて坐つていた。どの人の顔も真つ蒼になつ
ていた。お豊は又おどろいて仔細をきくと、かれが出て行つたあとで、執念ぶかいお紋は
お直にむかつて、その兄に対する恨みを又さんざんに列ならべ立てた。それがだんだんに募つ
て来て、わたしがこうして兄さんに捨てられたのも、おまえが蔭へまわつて何か讒訴をし
ているからに相違ないと云い出した。それにはお直も黙つていなかった。彼女は持ち前の
強情から飽くまでもそれを否認して、たがいに云い争つているうちに、お紋はいよいよ逆
上して、いきなりにお直の胸倉を引つ掴んで小突きまわすと、どうしたはずみか彼女の喉
を強く絞めて、十三の小娘はもろくも息が絶えてしまったのである。お豊もそれを聞いて
呆あっけ氣けに取られた。よく見ると、まったく嘘ではない。お直は冷たい死骸となつてそこに横
たわつているので、お豊はあわてて出来るだけの介抱をした。水をのませても、水天宮様
の御符ごふを飲のみませても、擦さすつても揺ゆぶつても、お直はもう正体がないので、彼女も途方にく
れてしまった。

こうなつては、とても自分ひとりの知恵や分別にはあたわらないので、お豊は汗を流しな

がら再び倉田屋へかけ付けた。かれはお紋の母を呼び出して、そつとこの始末を訴えると、母もびっくりして半分は夢中で駈けて来たが、死んでしまったお直を生かす術すべはなかった。表向きにすれば、お紋は無論に下手人である。この上はなんとかして此の事件を秘密に葬らなければならぬと、母はお豊と額ひたいを突きよせて密談の末に、ようやく案じ出したのがお直の家出という狂言の筋書で、お力には母からよく云いふくめて、お直が途中からどこへか姿を隠したように甲州屋へ報告させてあった。師匠に当日叱られたということが、かれらに取つてはおあつらえ向きの材料で、お紋の母はそれから趣向をうみ出して、一個の狂言作者となりすましたのであった。

それにしても、お直の死骸をどこへか処分しなければならぬので、お豊は更にお紋の母と相談の上で、谷中やなかまで出て行つた。そこに住んでいる石屋職人の千吉というのはお豊の叔父にあたるので、彼女は仔細をあかして死骸の始末をたのむと、千吉は慾に目がくらんで引き受けた。かれは日の暮れるのを待つて、一挺の辻駕籠を吊らせて、駕籠屋の手前は病人のように取りつくろつて、お直をそつと運び出して行つた。

これで万事解決したと思つていたが、お豊は壁にかけてある清書草紙を忘れていた。お力は帰るときに自分の草紙だけを持って行つたが、お直の分はそのままに残つていた。あ

まりに慌てていたのと、ふだんから草紙などというものに注意していないので、お豊は今朝けさになつてもその草紙には気がつかなかった。そうして、動かない証拠を半七に押えられたのであつた。

甲州屋の藤太郎は半七にむかつて、お紋とのわけを正直に白状してしまつた。二人が女髮結の家で出逢つていることも打ち明けた。しかし、その二階でこんな椿事が出しゅつ来たいしていることを、彼は夢にも知らなかつた。半七もさすがに思い付かなかつた。たとい事情がどうであろうとも、人間ひとり殺されては一大事である。なるべくはその死骸を片付けないうちに、石屋の千吉を取り押えてしまいたいと思つたので、彼はお豊を案内者として、すぐに谷中へ急いで行つた。

「お話は先ずこれぎりです」と、半七老人は云つた。「お直は生きていましたよ」
「生き返つたのですか」と、わたしは訊きいた。

「そうですよ。もとが女の手で喉のどを絞めたんですから、一時は息がとまつても、また生き返つたんです。駕籠にゆられて行く途中で自然に息を吹き返したのですが、駕籠屋は始めから病人だと思つているので、別に不思議にも思わなかつたらしいんです。千吉はおどろ

いたんですが、まあともかくも自分の家まで連れ込ませて、駕籠屋を帰してしまいました。死んだ者が生きかえって、本来ならば喜ぶ筈なんです。この千吉というのが良くない奴で、生かして帰してしまえば倉田屋からたんまりした礼金も貰えない。いつそ黙って何処へか売り飛ばして自分のふところを温めれば、一挙兩得だという悪法を企んで、お直にはさるくつわ猿轡さるくつわをはませて戸棚のなかへ押し込んで置いたんです。そうして、倉田屋の方へは、その死骸を人の知らないところへ埋めたようなことを云って約束の礼金を貰い、その後も相手の弱味につけ込んで、時々ゆすりに行こうぐらいに考えていたんです。昔はこういう悪い奴が随分ありました。もうひと足おそいと、お直はどこかの山女やませげん衛ゑんの手に渡されて、たとい取り返すにしても面倒でしたが、いい塩梅あんばいにすぐに取り返してしまいました」

お直が無事に戻って来たので、甲州屋では世間の手前をはばかって万事を内分にしたと云った。倉田屋からも甲州屋の方へしきりに泣きついて来た。ほかの関係者はともかくも、千吉だけは免ゆるして置かれなれないと思つたが、かれを表向きに突き出せば関係者一同もその係り合いを逃がれられないので、半七は我慢して彼をも見逃がすことにした。それが動機となつて甲州屋にはお紋という嫁が出来た。

自分の弟子が救われたので師匠の山村小左衛門は半七のところへわざわざ挨拶に来た。

かれは感謝の意を表するために、報恩額の三字を大きく書いた。甲州屋ではそれを立派な額に仕立てて半七に贈ったのであった。

「半七先生のいわれはこうですよ」

老人は再び大きい声で笑った。わたしも釣り込まれて笑い出した。

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（三）」光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年5月20日初版1刷発行

1997（平成9）年5月15日11刷発行

※旺文社文庫版を元に入力し、光文社文庫版に合わせて校正した。この過程で確認した、両者の相違を示す。

・たなばたに供えるらしい素麺「#旺文社文庫版「たなばたに供えるらしい素麺」

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：網迫

校正：藤田禎宏

2000年8月22日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

半七先生

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>